

ネパール大地震 2015

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナンダール マダーブ ナラエン

初めに今回のネパール地震で亡くなられた方々、ご家族の方々に心からお悔やみ申し上げます。そして被災された方々へお見舞い申し上げます。

2015年4月25日、午前11時56分カトマンズの北西約80kmを震源とするマグニチュード(M)7.8の地震が発生した。その日は土曜日、ネパールでは日曜日に当たる休日だった。広い地域での多くの建物の倒壊、地割れ、遺跡の消失、エベレストでの雪崩、山岳地帯での山崩れ、道路の寸断、そして下敷きになった人々、行方不明者、次から次と入るニュースは次第に明らかにされる被害の大きさを伝えていた。

ライフラインの寸断により電話は繋がらなくなっていたが、私が災害の第一報を受けたのはネパールからのSMSメールだった。発生から約20分後であったかと思う。最初に知ったのはカトマンズのダラハラ塔が崩壊したということであった。ダラハラ塔については、偶然先月号で里子のエッセイとして掲載したばかり、崩壊のことを聞いて信じられなかった。ダラハラ塔はカトマンズ町を一望できる塔で、その日は200名以上の観光客で賑わっていたという。地震で崩壊し9階建の塔が1階だけになった。殆どの人が生き埋めになった。恐ろしいことだ。

国内では繋がりにくいメールやネット電話は外国からのものが繋がりがやすかったようだ。地震から2時間後、家族の無事が確認できた。その後も続々とSMSメールが届き、カトマンズ町の様子を知ることになった。町の殆どが壊滅状態で、特に世界文化遺産とされている寺院の多くが崩れ跡形もないほどであった。またこれらの寺院や家屋の下敷きになり多くの人々の命が奪われた。

カトマンズ町は私が生まれ育った所、崩れた寺院の一部は実家から300メートル、

ダラハラ塔は500メートルの所にある。今は二番目の兄家族が住んでおり、もの凄い揺れと建造物の倒壊音や埃で生きた心地がしなかったと思う。

地震の被害は日を追うごとに、その大きさがわかってきて、国土の1/3およそ37郡に跨る災害となっていた。5月中旬ネパール政府の発表によると、900万人が被災し、死者8千名を超え、負傷者およそ1万8千名、家屋の損害71万棟以上に達している。しかし、今でもまだその全容がつかめていない。

そして、また5月12日午後0時50分、カトマンズの東北東約75km付近でM7.3の大きな地震があった。14日現在、死者は約100名、負傷者は1,000名を超えた。最初の地震で傷んだ建物は次から次と倒壊した。最初の地震で約3千名の死者を出したシンドゥパルチョコク、そして隣接しているドルカも壊滅的被害を受けた。

被災者はテントやビニールシート一枚の屋根だけの屋外生活でこれからの雨季、健康のことも心配だ。災害後、多くの国々から救援部隊が駆け付け、また支援物資が届いた。テント、緊急食糧物資、医薬品等、これを受け入れるため空港も24時間稼働させた。しかしネパールの国際空港はトリブバン国際空港ただ一つだけで、受け入れにも限界がある。先月号の巻頭言が今回の予告のようになってしまった。政府は突然の災害に対応しきれていない。

カトマンズでは災害時の略奪や大きな暴動は起こっておらず住民は助け合って生活している。MCJのニリマル・マナンダール理事が地震発生時ネパールへ帰国していたため、日本へ戻るのが2週間遅れた。その間、ミランクラブの里子のいる被災地ブンガマティ村でネワー国際フォーラムジャパンからの食糧支援を行っている。日本からの初期の里子訪問で訪れた村である。また家族、特に祖母からの要望で

被害の多かったダルマスタリ村にも食糧を届けた。

度重なる余震で住民の不自由な生活は長引いている。都市ではライフラインが戻り、水、食糧も手に入っているようだが、地方では倒壊した瓦礫も撤去できず遺体が埋まったままであるという。特に山岳地帯では地滑りで村ごと消滅したところもあり、生き残った人々への衣食住が足りず、支援物資も届かず、大変な生活を強いられている。

国は地震のよる損失に加え観光収入も見込めず窮地に立たされることになった。復興費用 50 億ドル、国の GDP の約 20% が必要になるとされている。今回の地震による雪崩で外国人登山家らも亡くなっており、暫く観光客の足は遠のくだろう。

ネパールはインドプレートがユーラシアプレートに衝突、沈み込んでいる境界に位置していて世界的に地震活動が活発な地域の一つである。

1934 年にも M8.1 の大地震があり、たくさんの被害に見舞われた。その約 100 年前 1833 年にも大地震があったと報告されている。ネパールには 100 年サイクルで地震が起きると言い伝えがある。確か、専門家たちはもう何時地震が起きてもおかしくないと言っていたが、まさかこんなに早く突然に起きるとは誰も想定していなかったに違いない。

政府は地震地帯に位置するということで、今から 22 年ほど前に、新たに建築する場合は耐震構造導入の指針を示していた。しかし、これは都市優先に示されたもので、地方まではどうだったか定かではない。そして既存の建物に対する耐震性や補強などについての政策は一切なかった。耐震性のない住宅を上へ上へと増築することに対しても規制が甘かった。多くの家屋は古く、大地震に耐えられるものにはなっていない。また殆どの人は地震に対する知識もなく備えもなかった。

今はまだ混乱の中にある国ではあるが、政府には実行してほしいことがある。忘れた頃に繰り返される災害、政府は今回のこ

とを教訓に耐震性の工夫、建物の階数制限の実施、この記憶を残し教育現場でも語り継いでいく準備をしてほしい。

MCN から国の現状やミランクラブの里子たちの安否、支部や村々について、学校についての報告と写真が送られてきている。会報原稿締切の関係で参考までに原文で載せるが、残念なことに、その中にサンク村の里子ラシュミ・プラジャパティとダルマスタリ学校 3 年生のアンジャリ・ガレが亡くなったという悲しい知らせも含まれていた。電話でのやりとりで知らされてはいたが、確かなものとしての文字で見ると、また新たに悲しみが込み上げてくる。

送られた写真は大きな被害を受けた下記の地域のものである。

- ① コカナ、② プンガマティ、
- ③ トカ、④ タンコット、⑤ サンク
- ⑥ バクタプール、⑦ パネパ、
- ⑧ ドルカ、⑨ シンドウパルチョコ、
- ⑩ ラムジュン、⑪ ゴルカ、
- ⑫ ダルマスタリ、⑬ カブレスタリ、
- ⑭ ジートプート

文部省は今回の地震の影響で 1 ヶ月間の休校を指示した。しかし、これは校舎への被害、余震の影響もあって延長されたものなので、これからも再開が延びる可能性がある。教育の遅れを懸念して通常の長期休暇は短縮されることになるだろう。

今回の大地震で多くの方々からお見舞いの電話、励ましの言葉があった。心配して何年ぶりか、何十年ぶりかで連絡をくださった方々もあった。遠くから現金書留で義援金を送ってくださったり、他に寄付するのだったらミランクラブに任せたいと届けてくださったり、すぐに振込みしてくださる方、募金活動を始めてくださる方、多くの善意が集まり始めている。

皆様の被災者に寄り添う優しい気持ちや行動に心から感謝申し上げます。

そして余震の収まりと復興を願って、母国ネパールのこれからの歩みを応援したいと思います。